REGIONAL POWERS
CROSS-DISCIPLINARY STUDIES

新学術領域研究
「ユーラシア地域大国の比較研究」
ニューズレター
No. 14　2013年 5月13日発行

1. 終了のご挨拶

2008年12月に実質的にスタートした新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」はこの３月を持って，終了しました。メンバーの皆様，研究会などに参加していただいた皆様に厚くお礼申し上げます。

本領域研究の成果については，これまでも内外の学術誌等に発表し，また，本領域研究のディスカッション・ペーパーである『比較地域大国論集』のなかでも発表してきました。よりまとまった形では，ミネルヴァ書房から全６巻の「シリーズ・ユーラシア地域大国論」を刊行します。また，英語でも成果出版を行う準備を現在行っています。さらに，これまでに行われた国際シンポジウムの報告集２冊も今年度刊行されます。

幸い，新学術領域研究では終了の翌年度に研究成果とりまとめのための科研費が交付されます。これを利用して，上記の出版活動などを行っていく予定です。そういうわけで，今年度は，新学術領域研究の事務局やサイトも維持されますので，ご活用ください。

最後になりましたが，スラブ研究センターは，これからもスラブ・ユーラシア地域と世界の諸地域との比較をいろいろな形で続けていきたいと考えておりますので，皆様の今後のご協力をよろしくお願いします。［田畑］

❖

2.「シリーズ・ユーラシア地域大国論」第１巻，第２巻の刊行

新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」のまとまった成果として，全６巻の「シリーズ・ユーラシア地域大国論」が刊行されますが，そのうちの第１巻と第２巻が３月末に刊行されました。 以下の２冊です。

第１巻：上垣彰・田畑伸一郎編著
　『ユーラシア地域大国の持続的経済発展』
第２巻：唐亮・松里公孝編著
　『ユーラシア地域大国の統治モデル』

本領域研究では，総括班を除いて，６つの計画研究が組織されましたが，各計画研究が１冊ずつ刊行する予定です。

第１巻は計画研究「持続的経済発展の可能性」，第２巻は計画研究「エリート，ガバナン

ス，政治社会的亀裂，価値」が出版したものです。引き続き，計画研究「国際秩序の再編」による第３巻『ユーラシア国際秩序の再編』，計画研究「地域大国の文化的求心力と遠心力」による第６巻『近代文化におけるユーラシアとアジア』が順次刊行されます。ご期待ください。

なお，本シリーズの執筆者の皆様には，執筆された巻以外の巻についても２割引きで購入いただけるということですので，ミネルヴァ書房田引氏に直接ご注文下さい（tabiki@minervashobo.co.jp）。［田畑］

シリーズ・ユーラシア地域大国論１

『ユーラシア地域大国の持続的経済発展』　上垣彰・田畑伸一郎編著

序　章　地域大国比較研究の視座　　田畑伸一郎

第Ⅰ部　地域大国のマクロ経済動向

第１章　外貨準備の蓄積とグローバル・インバランス　　田畑伸一郎

第２章　工業化――その中期的評価　　上垣彰

第Ⅱ部　中国・インド・ロシアの制度構築

第３章　対外開放の政策と結果　　金野雄五・丸川知雄

第４章　ビジネス環境と製造業企業のパフォーマンス　　加藤篤史・佐藤隆広

第Ⅲ部　中国・インド・ロシアの労働と格差

第５章　労働市場問題　　佐藤隆広

第６章　地域経済格差　　星野真

第Ⅳ部　地域大国におけるエネルギーと環境

第７章　石油市場政策　　本村眞澄・細井長

第８章　エネルギー供給　　堀井伸浩

第９章　気候変動問題　　亀山康子

終　章　持続的発展の可能性　　上垣彰

シリーズ・ユーラシア地域大国論２

『ユーラシア地域大国の統治モデル』　唐亮・松里公孝編著

序　章　地域大国の統治モデルは収斂するか　　唐亮

第Ⅰ部　移行期の政治経済学

第１章　二つの市場化――ロシアと中国　　安達祐子・毛里和子

第２章　中ソ・露の政治改革戦略――政治的主導権とアジェンダの設定　　唐亮

第Ⅱ部　国家統合・政党制

第３章　中央地方政府間関係の中露印比較――財政制度変更のダイナミズム　　三宅康之

第４章　支配政党による統制とその限界

――統一ロシア党，中国共産党，インド国民会議派のケース　　大串敦・安達祐子

第Ⅲ部　ガバナンス

第５章　地方ガバナンスにみる公・共・私の交錯　　田原史起・松里公孝

第６章　土地紛争のメカニズムと地方政府の対応――中国とインド　　光磊［三輪博樹訳］

第７章　出稼ぎ労働者のガバナンス　　任哲・三輪博樹

第Ⅳ部　アイデンティティ

第８章　トルコとインドの国民統合と世俗主義　　澤江史子

第９章　民族領域連邦制の盛衰　　松里公孝・中溝和弥

終　章　一国地域研究を越えて　　松里公孝

❖

3. 総括シンポジウム「ユーラシア地域大国の比較から見える新しい世界像」開催される

新学術領域研究のこれまでの研究成果を総括し，このような研究の今後の可能性について議論するために，総括シンポジウム「ユーラシア地域大国の比較から見える新しい世界像」を 1 月 26 日（土）に早稲田大学国際会議場井深大記念ホールで開催しました。プログラムは 3 部構成となっており，午前の若手セッションでは，本研究にプロジェクト研究員として参加した若手の研究者の方々が，研究成果を 3 つの報告として発表しました。午後のセッションでは, 本研究において 6 つ設けられた計画研究から 1 人ずつが報告しました。以上の 9 つの報告は，扱う地域から見ても，ディシプリンから見ても，非常に多彩なものとなりましたが，ユーラシア地域大国の比較という視点の有効性を示すことができたように思います。

最後の総括討論「ユーラシア地域大国比較の成果と可能性」では，初めに，司会の天児慧氏（早稲田大学現代中国研究所）と討論者の小長谷有紀氏（国立民族学博物館）から本領域研究に対する評価や期待が質問をともなう形で提起され，各計画研究の代表者がそれに答えるという形で進行しました。世界の将来像の明確化や学際性の重視など，今後の研

究の取りまとめにとっても大変有益な議論ができたと思いました。

この総括シンポジウムは，スラブ研究センターの今年度の冬期シンポジウムを兼ねて開催されました。早稲田大学現代中国研究所には共催者となっていただき，運営面でも多大な支援を受けました。なお，当日は，107 人の参加者がありました。［田畑］

❖

4.「ユーラシア比較地域大国論集」No.12, 13 刊行

第 12 号の中村唯史編 *Imagining the Landscape: Views from Armenia and Japan* は，2012 年 9 月 12 日にエレヴァン市で開かれたラウンド・テーブル「想像の風景」での報告に基づく 7 論文を収録しています。これは第 6 班「文化」・科研費基盤Ｂ「近代以降のロシア文化における南方表象の総合的研究」・アルメニア共和国スラヴ大学が共同で開催したものです。論文の著者はアルメニア，日本，ロシアの文学者ないし文化人類学者で，考察の主題は，アルメニアの伝承・絵画・文様・装飾に見られる「鎖につながれた英雄」モチーフの系譜（アブラミャン論文），19 世紀中葉のロシア作家による沿ヴォルガ地域ルポルタージュ（望月論文），収容所の視覚的表象の比較対照（バイル＝グチノヴァ論文），アルメニア系英語作家サロイヤンの父祖の地との関係（メリクセチャン論文）その他，多岐にわたっています。その一方，風景や光景を，ナショナリスティックあるいは実体としてではなく，諸時代の痕跡を重層的に包摂し，多様な文化の交錯によって変化する動的構造として捉えようとする視点が，共有されています。これは著者たちが，周縁としての自己意識が伝統的に強いアルメニアや日本の関係者であるためかもしれません。［中村唯史（山形大学）］

第 13 号の望月哲男・越野剛編 *Orient on Orient: Images of Asia in Eurasian Countries* は，第 6 班が中心となって 2010 年 7 月 7-9 日に開催された同名の新学術領域研究国際シンポジウムの成果をまとめたものです。第 1 部 Orient on Orient in Cinema のイリーナ･メリニコヴァ，張英進，シュリニヴァスの 3 論文はロシア・中国・インドの映画におけるアジア・イメージを分析しています。第 2 部 West and East in Music のベンネット・ゾーン，梅津紀雄，井上貴子の 3 論文は西欧音楽におけるアジアのイメージおよびインドとロシアにおける西欧音楽の受容を扱います。第 3 部 Writers beyond the Border の小松久恵，杉山直子の 2 論文はインド系・中国系移民作家の創作を通じてアイデンティティやジェンダーの問題を論じます。第 4 部 Orientalism in Dialogue のツプルマ・ダリエヴァ，冨澤かな，アンナ・フロルコフス

カヤの 3 論文は都市景観，植民地経営，非公式芸術という異なった観点から東西のイメージのせめぎあいを分析しています。第 5 部 Ideology and Religion のリュドミラ・ジュコヴァ，応雄，住家正芳の 3 論文は宗教政策，プロパガンダ芸術，社会進化論を取り上げて，変容する伝統宗教・文化の問題を論じました。14 本の論文は多岐にわたるものですが，ロシア・中国・インドという地域大国と西欧や日本との相互関係の中で，様々なアジア・イメージが創造・再創造されていく過程を明らかにしました。［越野］

❖

5. 各種研究会レポート

● 第 4 班研究会「戦時期日本の喇嘛教・回教工作」開かれる

2012 年 12 月 1 日に東京理科大学 PORTA 神楽坂で開催された本研究会は，日中戦争期を中心に，日本人が主体となって行われた宗教工作に関する研究成果の整理と論点の析出を試みたものです。

第 1 セッションの高本報告では，明治・大正期日本人の「喇嘛教」との接触が主にチベット探検との関わりで生じたのに対し，昭和期には満蒙の宗教としての「喇嘛教」の意味が高まったことを指摘したうえで，満洲国における「喇嘛教」工作について，チベット仏教寺院組織再編や廟会（祭礼）に関する工作，大蔵経出版・寺院修復などを紹介しました。ナランゴア報告では，モンゴルにおける日本仏教各派，特に真言宗の活動に注目し，高野山および東京での留学生の受け入れ，研究所の設置，モンゴル現地における布教所・別院の建設など，国策を超えた宗教活動の実態が紹介されました。

第 2 セッションの安藤報告は，日中戦争期における日本の回民工作が，「対中国」という統一的な枠組みなしに，華北，蒙疆，江南，華南，満洲国といった個々の地域において別々に行われたことを指摘したのち，華北における「中国回教総聯合会」を通じた回民の組織化とその限界を論じました。小林報告は，日本において「回教」という表現が定着する過程と，東南アジアのムスリムに関心が向けられていく経緯を振り返ったうえで，インドネシアを占領した日本軍の回教工作の案出・実施過程と，現地ムスリム側の対応を，植民地末期から戦後までの問題の連続性を視野に入れつつ論じました。

これらの報告に対し，各セッション討論者の広川氏と松本氏，全体討論司会者の長縄氏，およびフロアから多岐にわたるコメントと質問が出され，特に日本人の宗教工作と現地における教育・宗教の近代化の関係，工作に関わる日本人自身の信仰，現地協力者の役割な

どが議論されました。研究会の出席者は58名にのぼり，このテーマに対する研究者の関心の高さと，さらに発展していく可能性を窺わせました。また，同じ日の午前中には，松本氏の科研費プロジェクト「1920年代から1930年代中国周縁エスニシティの民族覚醒と教育に関する比較研究」の主催により，第 4 班メンバーの池田嘉郎氏（東京理科大学）の講演会「ソヴィエト帝国論の新しい地平―1920年代～30年代のソ連民族政策」が開かれ，一日を通して，帝国論と東アジア研究が相互乗り入れする機会となりました。［宇山］

セッション1　大陸における対「喇嘛教」活動
　発表1：高本康子（北海道大学）
　　「日本人と「喇嘛教」―満洲国における「喇嘛教」工作を中心に」
　発表2：リ・ナランゴア（オーストラリア国立大学）
　　「日本仏教の内モンゴルにおける活動」
　討論者：広川佐保（新潟大学）
　司会：島田美和（慶應義塾大学）
セッション2　中国・東南アジア地域における回教工作
　発表1：安藤潤一郎（東洋大学）
　　「日中戦争期の中国大陸における日本の回教工作と回民社会―華北を中心に」
　発表2：小林寧子（南山大学）
　　「日本の回教工作の展開と帰結―インドネシアを中心に」
　討論者：松本ますみ（敬和学園大学）
　司会：宇山智彦（北海道大学）
全体討論
　司会：長縄宣博（北海道大学）

● **第4班ワークショップ「ユーラシア地域帝国としての清朝研究」開かれる**

2012年12月16日に東京大学駒場キャンパス18号館で開かれたこのワークショップは，現在の中国の基礎，とりわけ帝国性の基礎として位置づけられる面がある清朝の成り立ち，構造，変容を，ユーラシアにおける帝国の一つとして多角的な観点から見据えることを目的に企画されました。

第一報告は杉山清彦氏（東京大学）の「ユーラシアの中の大清帝国―「帝国」の支配構

造」で，中央ユーラシア国家としての大清帝国を，マンジュ人社会の性格，八旗による軍事＝権力編成，皇帝の「いくつもの顔」，ユーラシアの他の地域帝国との並立状況および共通性，そして19世紀における支配構造の転換といった側面から論じました。

小林亮介氏（日本学術振興会）による第二報告「チベットからみた清朝の変容過程―20世紀初頭のダライラマ政権の動向を中心に」は，18 世紀の清朝 - チベット関係を整理したのち，19 世紀後半に四川総督らがこの関係の改革に取り組んだものの，官僚間の確執と，ダライラマ政権の清朝官僚不信および皇帝への期待により阻まれたこと，20 世紀に入るとダライラマの清朝皇帝に対する期待・信頼も低下して，中国との対抗を選択するようになったことを指摘しました。

第三報告の阿部由美子氏（東京大学・院）「中華民国北京政府と清室の関係から見る，清朝-中華民国の連続性と正統性観」は，清朝崩壊後に中華民国がその版図を引き継いだことを正統化した理論は何だったのかという問題意識に基づいて，清朝政府と中華民国政府の間で締結された「優待条件」に着目し，特に皇室と旗人に関する優待条件を詳しく紹介しました。優待条件は満蒙回蔵の王公の地位と社会構造を保障し，清朝から中華民国への「禅譲」を象徴するものでしたが，北京政府の財政悪化により優待費の支払が難しくなり，1924年に優待条件が一方的に修正されたことで，少数民族の中華民国への不信感が強まったとのことです。

これらの報告に対し，岡洋樹氏（東北大学）と川島真氏（東京大学）から，清朝史を民族史的に理解することの妥当性，諸集団の権力との「近さ」と地理的近接性との関係，清朝崩壊後の皇室と仏教の関係などを問うコメントが出されました。また，フロアも交えながら，清朝統治の特徴と国民国家化について多角的な議論が行われました。報告のテーマとしては清朝・中国のみを取り上げた研究会ではありますが，他の帝国との比較や，帝国と近代の関係を考えるためのヒントが多く提供されたと思います。［宇山］

- **第 4 班と南京大学共催の国際ワークショップ Reconsidering Empires and De-Colonization 開催**

2012 年 12 月 21 日，南京大学ホプキンズ南京センターで，新学術領域研究第 4 班と南京大学国際関係研究院の共催により，国際ワークショップ Reconsidering Empires and De-Colonization が開かれました。帝国の衰退，脱植民地化，冷戦といった別々に研究されがちな問題群をまとめて，中国と日本の研究者で議論することを目的とし，南京大学出身で

アメリカのオーバーン・モントゴメリー大学で教鞭を取るチアン・ジャイ教授（2012 年 1 月の新学術領域研究国際シンポジウムに参加）が中心的に企画してくださいました。ジャイ氏のほか，南京大学，華東師範大学，廈門大学，中国外交学院に属する中国人 8 名と，日本人 3 名が報告者・司会者として参加しました。取り上げたテーマは，時代的には冷戦期を中心としながらもボーア戦争から現在まで，地理的には東アジア，東南アジア，南アジア，アフリカ，アメリカにわたる幅広いものでした。現在の微妙な日中関係とは別次元で，国際関係史について冷静で学問的な議論をすることができたのは大きな成果だったと思います。［宇山］

Panel 1: European Empires and Decolonization

Chair: Uyama Tomohiko, Hokkaido University

“The Boer War: A Turn-Point of British Decolonization,” Zhang Hong, Nanjing University

“Decolonization and the Transformation of European Diplomacy,” Pan Xingming, East China Normal University

“Economic Diplomacy of Jawaharlal Nehru Administration after Decolonization of South Asia,” Akita Shigeru, Osaka University

Panel 2: Decolonization in Asia: The Philippines, Burma, and Cambodia

Chair: Cai Jiahe, Nanjing-Hopkins Center

“Decolonization: A Perspective from Post-WWII Phillippines’ Development,” Liu Litao, Nanjing University

“Neutralism and Peaceful Coexistence: China’s Geostrategic Interests in Burma in the Cold War,” Fan Hongwei, Xiamen University

“China and Cambodia: The Making of a Special Relationship, 1954–1965,” Qiang Zhai, Auburn University at Montgomery

Panel 3: Anti-Imperialism and Anti-Colonialism in Africa and Asia

Chair: Kan Hideki, Seinan Jo Gakuin University

“The Exchange of Visits between Chinese, Indian, and Burmese Premiers in 1954,” Li Qianyu, China Foreign Affairs University

“Neo-colonization and the African Unification: Nkrumah Kwame Anti-imperialism Thought and Practice,” Fang Qing, Nanjing University

"Former Empires and De-colonization from the Perspective of Great Power Rivalry in the Third World after WWII," Liu Lei, Nanjing University

Panel 4: The United States and the World Order

Chair: Qiang Zhai, Auburn University at Montgomery

"New Imperialism and American Strategy," Gong Honglie, Nanjing University

"The Johnson Administration's Policy toward Indonesia and the Transformation of the Cold War Order in Asia, 1964–1968," Kan Hideki, Seinan Jo Gakuin University

● 新学術領域研究会「ユーラシア地域大国 の民族・思想・宗教」開かれる

2013年3月20日に北海道大学スラブ研究センター4階大会議室を会場として行われた研究会「ユーラシア地域大国の民族・思想・宗教」は，当領域研究を通して取り組んできたユーラシア地域大国の比較研究を，今後も継続して行っていくための糸口を探る目的として開かれました。

プログラムでは，まず後藤がマルクス主義思想とナショナリズムの関係を整理したうえで，両者が理論的には対立するものでありながら，実際には密接なつながりを持って発展してきたことを，ソ連とインドにおける歴史的事例を比較しながら検討しました。続いて藤倉達郎氏が，ネパール共産党（毛派）マオイストの主導する連邦制のあり方をめぐって，ネパールで今日見られるようになったナショナリズムの傾向について，自らのフィールド調査の結果を交えながら報告しました。

後半では中国の少数民族と宗教に関する報告が行われました。その中で，木村自氏は中国雲南省回族の事例を取り上げて，経堂教育と呼ばれるイスラーム宗教指導者を再生産する仕組みを，村落コミュニティの内外で支える構造的な観点から解説しました。村上大輔氏は，チベット人の宗教的信仰に基づいて行われる伝統祭祀と，その実施を制限しようとする中国政府の動向のせめぎ合いにおいて，条件に応じて両者の対峙する境界が微妙に変動する状況を指摘しました。

この他に，前半では三輪博樹氏，後半では高本康子氏の二人の討論者によるコメントを皮切りに，フロアを埋めるおよそ30名の参加者から様々な意見や質問が出され，活発な議論がなされました。本研究会では，ユーラシア地域大国における国家，民族，思想，宗教が，それぞれ独自の仕方で絡み合いながらも，そうした状況を捉える上では互いに共通する基盤が見出され，今後も比較研究の機会を持つことの意義が確認されました。［後藤］

司会　小松久恵（SRC）

セッション１　13:30～15:30

報告者　後藤正憲（SRC）

「マルクス主義とナショナリズム―ソ連（ロシア）とインド比較の視点から」

藤倉達郎（京都大学）

「ネパール，北インドのマオイストと民族運動」

コメンテーター　三輪博樹（SRC）

セッション２　15:45～17:45

報告者　木村自（大阪大学）

「中国の回族（ムスリム少数民族）の宗教教育を維持する仕組み」

村上大輔（中国西蔵・日本教育文化交流協会）

「ラサにおける宗教信仰の社会的動態に関する報告―伝統祭祀と大衆文化の事例から」

コメンテーター　高本康子（SRC）

❖

事務局体制の変更

越野剛氏のスラブ研究センター准教授就任に伴い，今年度の事務局は，後藤正憲，阿部僚子の２人体制となりました。引き続き，よろしくお願いいたします。

発行者：田畑伸一郎（領域代表者）
事務局：後藤正憲，阿部僚子
電 話　011 － 706 － 4809
ファクス　011 － 706 － 4952
メ ー ル　rp@slav.hokudai.ac.jp
Ｈ Ｐ　http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/index.html
住 所　〒060－0809 札幌市北区北９条西７丁目
北海道大学スラブ研究センター